

大規模災害後の記念碑・追悼行事・儀式に関する配慮事項 ～東日本大震災に焦点をあてて～

1 学校側が配慮すべきこと

この度の東日本大震災のように、心に衝撃を与えかねない体験の後、半年・一年といった節目の時期に学校で行う記念行事や追悼式典は、児童生徒や教職員のみなさんが精神的に回復していく過程において、重要な役割を果たします。こうした行事は、人と話することとはまた違ったさまざまな方法で、感情を表に出す機会を与えてくれます。また、学校での記念行事は、深い悲しみの時期に一度区切りをつけ、通常の学校生活へ戻るきっかけを与えてくれます。そしてこの機会に、児童生徒も教職員も、「これまででできたこと」「助け合ったこと」「成長したこと」に焦点をあてて、振り返ってみることをすすめます。

記念行事には、植樹をしたり、手紙やカードを書いたり、あるいはもっと伝統的な追悼式を行うなど多くの形式が考えられます。各行事が精神的な回復に役立つ度合いは人によって異なり、また感情の表現方法も違うことから、大きなイベントを一つだけ計画するよりも、さまざまな行事をいくつか行い、幅広い感情の表現の機会を提供することが大変重要です。

今回の震災においては、震災だけでなく原子力発電にかかわる汚染の問題や震災の被害の地域的な差異があることから、追悼に関する行事を計画するにあたっては、多くの児童生徒の適応状態に配慮するなど、多面的に是非を検討したうえで行う必要があります。「記念日反応」として、記念日や大切な人の命日には、できごとや故人を思い出し、さみしく悲しい気持ちになることがあります。援助ニーズの大きい児童生徒や家族、特に家族を亡くした子どもには特別の配慮が必要です。

今回の東日本大震災のように、予兆を把握しにくく繰り返し起こり得る自然災害や終息がはかりにくい原発汚染の問題では、アメリカで起きた2001年9・11同時多発テロ事件の際と同じく、単にある児童生徒や先生が亡くなった場合や、一過性の自然災害により複数の人が亡くなった場合とは状況が異なります。したがって追悼行事の計画にも特別の配慮が必要となります。そうした大規模災害がまた起こるかもしれない、あるいは悲惨な状況が起こるかもしれないという恐怖が続いていることで、震災から一定の期間がたっても、気持ちを整理して前向きになることは容易でないかもしれません。

こうした場合は、追悼行事に集まることで、人々が感情や不安を共有し、孤独感や無力感を弱めることが、非常に重要な目的です。さらに、どんなに小さなことでもよいので、安心感を高め、効果的な予防につながる取り組みについて考えるよう、参加者に呼びかけることも、追悼行事の目的になります。

2 追悼行事を計画する際のガイドライン

以下は学校側が考慮すべき注意点です。被災地から離れた場所にある学校で、追悼行事を行うことが必要だと学校が判断した場合には、被害者やその家族を直接知らない児童生徒も、追悼行事には参加をしてもらいましょう。

①ゆっくりと準備を進めましょう。計画や方針を決める段階で、児童生徒、教職員、家族、地域の方々に参加してもらいましょう。たとえば、米国オクラホマで起きた爆弾テロの犠牲者を悼む記念碑の計画と建造は、5年の年月をかけて行われました。

②学校管理職、教師、保護者の方々と児童生徒を構成メンバーに入れて追悼行事実行委員会を作ってください。できれば、被災者との個人的なつながりのあった児童生徒に、本人の意思を尊重したうえで計画の段階から参加してもらうことが大変重要です。

③追悼行事は、必ずしも亡くなった方を悼む記念碑建造である必要はなく、一連の行事・活動として計画することもできます。グループに分かれてのセレモニーや、各教室で思い思いの弔辞や絵・カードや手紙などを書くことも有効です。

④異なる文化を持ちながら日本で生活している人もいます。そうした人々の文化的・地域的背景に基づく儀式、伝統、信仰、活動などを尊重しましょう。

3 効果的な追悼行事の例

①仮設の追悼会場を設けることができます。亡くなった方々を悼み、救出・救援にあたった人たちに感謝の気持ちを捧げるために、学校内に場所を定め、生徒や教職員が、花やメッセージ、詩、リボン、ぬいぐるみや写真などを持ち寄ることができるようにします。学校と地域住民が意見を出し合い、より恒久的な追悼場所に移すかどうかを決め、可能でない場合は、ふさわしいやり方で仮設の追悼場所を終了させます。恒久的な追悼の場を学校内に設置する場合は、慎重にその場所を検討し、各自が自分の意志でその場を訪れるかどうかを決められるよう、正門以外のところを選ぶようにしましょう。

②大きな災害・事故を経験した学校や地域でよく求められるのは、いわゆる「希望の贈り物」です。これは、将来似たような悲劇が再発するのを防ぐための活動やプロジェクトを指します。例えば、安全や防災について話し合う活動や教科を設けることは、「希望の贈り物」のよい例です。また災害後、児童生徒がどのようなことができたか、どのように助けあったか、どのような点で成長したかについての発見も「希望の贈り物」です。

③年齢に関わらず「書く」ことは特に効果的です。児童生徒たちはカードや手紙、ポスターなど書いて、赤十字等の支援団体を通じて被害者の家族や救出作業にあたった人たち（警察・消防など）へ送ることも効果的です。中学生や高校生なら、市町村、都道府県、または国の政府宛に手紙を書くこともできるでしょう。

④障害のある児童生徒たちも含め、全員が何らかのかたちで参加するよう心がけてください。児童生徒の知的・情緒的発達に合わせて、活動内容を調整しましょう。その行事がすべての児童生徒にとって、参加意識が感じられるように、そして活動がふさわしい内容になるように、特別支援担当の教員から助言を仰いでください。

4 発達段階に応じた配慮

追悼行事は、児童生徒たちの発達段階に適した形態のものを計画しましょう。

①幼い子どもたちの場合、たとえ事態の全容を理解していないとしても、悲嘆の気持ちを表現するために何かをすることが必要です。絵を描いて、学校の廊下に貼ったり、被災者を助けた消防士・警察官や被災地の子どもたちに送ったりすることは、幼い子どもたちが気持ちを表現し共有する、素晴らしい方法です。学校全体の追悼式典の中で、歌を歌ったり、詩を朗読したりすることもよいでしょう。子どもによっては、つらい気持ちが強い場合があります。気持ちの表現には個人差があることに留意しましょう。

②中・高校生となると、事件・事故を忘れず、被害者を悼むことだけでなく、同じような悲劇の再発をできる範囲で防ぐための学校や地域社会での活動に、自分が貢献したと感じられるようにするものが必要です。

③中・高生ならば、追悼行事の計画のあらゆる面（事前準備、議事進行、後片付けなど）に参加させましょう。例えば、安全教育の内容や子どもにできる対応策などを生徒から募ります。そうしたアイデアを書いた手紙を、生徒が政府や当該機関に送るのもよいでしょう。中・高生であれば、地震や津波の自然科学的特徴や、安全・予防教育などの歴史的経緯について学ぶことは、克服に役立つかもしれません。

5 学校で追悼式典を行う際のガイドライン

①管理職は地域にある他の学校などとも協議し、必要に応じて情報交換をしながら計画すると、より効果的です。

②すべての学年の児童生徒を式典の計画に参加させることが好ましいでしょう。

③記念式典は短時間に抑え、内容が児童生徒の年齢にふさわしいものになるよう気を配ること。小学生であれば、15分から20分程度が望ましく、年齢の高い生徒であっても1時間程度を限度にしましょう。

④音楽や児童生徒自身による演奏を、式典に盛り込みましょう。静かな音楽を入・退場の間にかけることで、穏やかなムードをつくり、保つことができます。

⑤児童生徒・保護者・教職員で事前に式典の進行や内容について検討しましょう。教師は児童生徒にこの式典が通常の集会とはどのように違うかについて理解させ、ふさわしい態度がどんなものかを、児童生徒と話し合しましょう。

⑥短いスピーチを数人をお願いしてください。生徒たちに広く知られていて、安心と安全の象徴となるような人、つまり児童生徒に大丈夫だという安心感と援助を与えることができる人と思われている人（たとえば市長、校長、地元の警察署長や、地元自治体の教育長など）が望ましいでしょう。

⑦状況に配慮し、精神的な負担のない範囲で、児童生徒の家族も招待しましょう。

⑧追悼式典には、児童生徒・教職員全員が参加するのが望ましいです。こうした式典は、学校全体の絆を強め、児童生徒一人ひとりが大切な存在であるというメッセージを送る効果があるためです。ただしつらい気持ちが強く特別な配慮を要する生徒の場合は、式典の時間の間に、落ち着ける場所で何か静かに行うことができる活動をする（例：黙とうする）など、児童生徒の状況に応じた活動を考えることが大切です。その際は児童生徒や保護者と相談して進めましょう。保護者といっしょに行事を行い、終了後、保護者といっしょに帰ることを勧めます。

⑨被害者を悼み、平和や平穏を奨励するようなクラスの旗やポスターを持ち寄るよう、各学級に呼びかけましょう。事前に学級担任や美術の教科担任と連携し、授業での制作活動と関連づけて行事の一環とすることもできます。

⑩追悼式典の中に、生命や希望を象徴するシンボルを盛り込みましょう。風船やろうそくは、心の痛みや悲しみを認めながら、未来への希望を感じさせるような、前向きでポジティブな気持ちをもたらすシンボルとして大変効果的です。

⑪全校での記念式典の後、下校前に児童生徒は一度自分の教室へ短時間でも集まるようにしましょう。それにより、他の児童生徒、教師、（可能であれば）カウンセラーなどメンタルヘルスの専門家などと、式典でどんなことがあったか、どんなことを感じたについて話し合う時間をもつことができます。そして、よりていねいな対応が必要な子どもを把握することができます。

⑫実行委員会のメンバーの方だけでなく、すべての保護者が追悼行事のことを事前に把握できるよう連絡をとり、家庭からも気になる様子があれば連携ができるようにしましょう。

⑬その地域に根差した、さまざまな伝統や儀式などを取り入れた集会を行うようにしてください。

6 行事の後のフォローアップ

トラウマとなるような経験・衝撃的な体験を、過去のものとして一旦整理し、前向きになることが、長い間困難な場合があります。たとえば、復興活動に時間がかかっている場合、トラウマとなるような事故の影響が長期に渡る場合などが考えられます。また「記念日反応」で、児童生徒が深い悲しみを感じたり、抑うつ的な気分になったりする場合があります。こうしたケースでは、児童生徒の不安に応えるための活動を、学校側が検討することが大変重要です。

スクールカウンセラー、また学校心理士の資格をもつ先生たちが協力して、援助ニーズの大きい児童生徒の援助が行えるよう準備することが必要です。また行事を契機にして、日常的なケアのためのシステムを状況に合わせて改善したり、進展させたりすることを検討してみてもよいでしょう。またこのような行事の影響は、直後に出る場合ばかりではないことから、内外の専門家が協力して、継続的な観察を行うことが重要です。具体的なフォローアップについて以下に例をあげます。

①記念日の行事の前後テレビ等のメディアで、東日本大震災の地震やつなみのシーンが、繰り返し映されることが考えられます。テレビなどの報道にふれる時間を制限するよう、児童生徒や保護者に伝えてください。

②行事の前後は、家族など信頼できる人と一緒に過ごすようすすめましょう。また気持ちがつらくなった場合の相談先について、児童生徒や保護者に連絡しておきましょう。

③避難してきた子どもたちや家族に対して地域のボランティア活動、食料や他の寄付活動などと、学校による活動との連携をはかることも効果的です。

④今の問題を最小化し、これららの問題の予防になることをめざして、安全や防災教育、他者の痛みや考えに配慮する心の強さや寛容さを育てる教育プログラムなどを企画・実施することも大切です。

④恒久的な記念碑を建造する、または継続的な記念財団を設立して現在及び将来の災害援助に役立てるための継続的な記念財団を設立することも考えられます。

Translated and adapted from Memorials/Activities/Rituals Following Traumatic Events : Suggestions for Schools National Association of School Psychologists translated

Translated by Keiko Nagata at the Japanese Mental Health Network in New York of the Japanese Medical Support Network (JAMSNET) in New York, and reviewed and adapted by Hisako Nishiyama, Naoko Shimada, and Toshinori Ishikuma at the Japanese Association of School Psychologists(JASP).

©National Association of School Psychologists